
喚呼の法

千海

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喚呼の法

【Nコード】

N5565U

【作者名】

千海

【あらすじ】

エンターキーを押したつもりが、僕は異世界なんてところに召喚されてしまった。エンター（入る）＋キー（鍵）で異世界に行っちゃうなんて、うまいなあと思ったのは皆には内緒だ。まあ。そんな寒いギャグ共有できるような友達も居ないけど。引きこもり歴8年の主人公が異世界の戦争に巻き込まれ・・・平和な国で育った僕（しかも進行形で引きこもってるのに！）が戦えるわけないじゃないか！！なちよつと異色のファンタジー。

プロローグ

「消えればいい」

と、彼女が言った。

聞き慣れた彼女の言葉だった。

僕は初めて彼女の瞳を見つめ、気づいた。

その瞳は僕のことなんて少しも映してないことに。

彼女の視界の一片にさえ、僕は存在していなかった。今までの僕なら、きっとそれに安堵したことだろう。

その一言は僕を覚醒させた。

僕は、彼女の一言で永い眠りから強制的に目を覚まさせられた。

それはすさまじい威力を宿した言葉だった。

たぶん、目の前で言われたことも関係しているのだろう。

でも、そんなことよりも。

きつと、気づいてしまったからだ。

彼女という存在を認識することによって、全てがとけ込み境界が
あやふやになっていた世界から、僕は切り離された。

僕が僕であることを、ようやく認識できたように思えて、不謹慎
ながら、僕は笑ってしまった。

これは、しばらく先の話。

籠城生活　？まだ兵糧攻めにはあっていない・

朝日が遮光カーテンの隙間から漏れる。

お気に入りの音楽に割り込んでくるバイクの重低音が聞こえたから、そろそろ眠る時間だ。

いつも思っけどあのバイクの人、近所迷惑だよな。きっと違法改造してるに違いない、なんて思うのも毎度のこと。

僕はディスプレイの電源だけ消して、ヘッドホンを定位置に置いた。パソコンを落すのはフリーズしたときか、よっぽど気分が向いた時だけ。パソコンは立ち上がったままのほうがいい。目覚めてすぐに使えるから。

そして、体を持ち上げてちょっとばかり背骨を伸ばすと、すぐ後ろのベッドへと腰を下ろした。すぐ後ろってどれくらいかということ、歩いて二歩くらい。

この部屋の唯一の通路は、パソコンが乗った机の椅子を引いたらベッドにぶつかるくらい狭い。まあ、起きてる時間はずっとパソコンに向かってるから、狭さを感じるのはやっぱり椅子を引いた時くらいだろうか。椅子のローラーがガツってなって、ヤバい、生活音を立ててしまった、なんて焦るのも年に数回。よほどテンションが上がった時か、いきなりお腹を下した時か…後は頭が空っぽになってた時くらいかな。

ふと部屋を見回す。

黄土色の遮光カーテンから漏れる光で、部屋の中に浮かび上がる物。部屋の隅っこに置かれた収納ボックスと、その上にきちっとたたまれた衣類が目に入る。

あ、ホコリの塊がある。

だいたい、遮光カーテンのくせに光が漏れるなんて…やっぱ、安かったからかな。

薄暗いくらいだと余計フローリングのホコリが浮かんでみえてダメだな、なんて思ったところで、僕は頭をゆるゆると横に振る。

だめだ。やめとけ。考えると腹が減る。

そうでなくとも僕は1日1.5食生活だ。カロリー摂取は極限まで控えている。おかげで肋なんてあるだけせんぶ浮かんで見える。

自分の細い腕を眺めて、女みてえ、なんて揶揄するけど。あれだな。お隣の奥さんの方がよっぽど僕より腕力があるだろうな。小さい子供2人を余裕で抱っこしてるのを見かけた時があるもんな。そうすると僕の腕は女の人より女みてえ…となるわけだけど、うん、考えるだけ無駄なことだ。

大体、腹が減るから考えるのをやめようとしたばかりだというのに。

早く寝ないとお手伝さんが来てしまう。来たからって会う訳じゃないしどうってことないけど。この家に誰か居るって意識するのを、精神衛生上、なるべくなら避けて通りたい。だから寝たフリ。フリっていうよりここまで起きてたら眠くてたまらないんだけどさ。

僕はいつ洗ったか覚えていない枕に頭を乗せる。トイレもさっき行つといたから問題ない。ここまで疲れてたら今日も嫌なこと考えずに眠れそうだ。

おやすみなさい。朝だけど。

僕は現在進行形の引きこもりである。引きこもって8年になる。

ほんとは日にちなんて数えたくないし、数えてもいないけど、ミヨコさんが食事のついでに用意してくれるクリスマス・ケーキに刺さって付いて来たレプリカ柎の飾りの数で、自分が引きこもってどれくらいになるのかわかってしまう。捨てればいいのに、どうしたことか僕は柎の飾りを捨てられずに居る。閉じこもって何年になる

のか忘れちゃダメだ、なんて。心のどこかで思ってたりのかな。籠った原因はもう覚えていない。っていうか、原因たりえる衝撃のイベントなんてものは存在しなかったはずだ。

国語の授業で「行人偏」を習った日からあだ名が「ぎょうにんべん」になった小学生時代を経て、学区内の中学校へ。そして何を間違ったのか高校受験に成功し、進学校で有名な私立高校へと進学した。何でそんなとこ受けたかというと、中学教諭に勧められたつてのと、家から近かったという単純な理由から。振り返ってみても小学生の時に名前をからかわれて嫌な思いをしたくらいで、本格的なイジメらしいイジメを受けた訳でもなく。やっぱり、平々凡々な自分の歴史に墨汁をこぼしたような消えない跡があるわけでもない。

そこそこのレベルの国立大学の入試も現役でパスして、入学式、そして夏休み…というところで、僕は世の中からフェードアウトしていった。大学生つてたしか18歳くらいで1年生だから…今は26歳くらいかな。

両親は共に健在。だけど、僕が大学に入ったあたりからずっと海外赴任してる。たまにメールで連絡がくるくらいで、籠ってから一度も会ってない。ミヨコさん、うちのお手伝いさんからきつと連絡が行ってるんだろうけど…これって、放置されてるってことなのかな？会いたくないから今は逆にありがたいけどね。

そう。ミヨコさん。僕のためにお手伝いさんを雇えるくらい、父親は稼ぎがいい。家の中で一番狭い部屋（ぶっちゃけ物置）を籠城の舞台にしているんだけど…なんていうか、家でかいし各部屋が広いもんで…物置^{そこ}くらいしか安心できる場所がなかったんだよね。今現在、僕はそういう環境にある。

だから家政婦みたいなことをしてくれるミヨコさんが一番近い人なんだけど、籠ってるから通常コンタクトもなければ会話もなし一通りの家事をこなして僕の夕ご飯と粗食を用意したら、彼女は毎日午後3時で自宅へ帰って行く。

家の中から人の気配が消えたのを確認して、僕はやっと城^{へや}を出る。

食べて、出して。たまにシャワー浴びるかな。で、パソコンでネット小説や動画を見ながら時間をつぶして、翌朝、例のバイクの音を聞いてから就寝する。

このサイクルをかれこれ4年くらい続けている。バイクの兄ちゃん（想像だけ）は4年前に現れたのだ。重低音が煩いと思いつながらも毎日同じ時間に走る律儀な彼には実はちよつとだけ感謝してるし、意外と近所の人たちにも重宝されてるんじゃないだろうか。

籠る部屋があつて、家事をしてくれる人が居て、ご飯も出してもらえるし、ネット設備まで充実してたら、大きい声じゃ言えないけど、部屋から出ようなんて益々思わなくなるよね。って、出たくなから出ないだけなんだけどさ。

この籠城生活。世の中から忘れ去られた僕を物理的に攻撃してくるような奇特な人は今のところ居ないから、まだ兵糧攻めにもあつてない。これから先、もしも兵糧攻めにあつたら、僕はきつと飢えて死ぬだろう。食べ物を得るために外に出るなんて考えられないし、それが意図されたものだとしたら尚のこと。あれ？自分の意志で食べなくて餓死するって、自殺になるのかな？

眠りかけたところでハッと目が覚めた。

？眠る前にアレだけダウンロードしておかないと！

僕は体を起こして床を二歩進み、ディスプレイの電源を入れる。マウスを左右に振って寝入ったパソコンを揺すり起こす。

現れたダイアログボックスに半角小文字でパスワードを打ち込んで、エンターを押そうと右手の薬指をのばした。僕は小指じゃなくて、薬指派だ。そんなことはほんとどうでもいいんだけど…よく確認してから押すんだっとな、なんて思っても後の祭りで。

エンターキーを押したつもりが、僕は異世界なんてところに召喚されてしまった。エンター（入る）＋キー（鍵）で異世界に行っちゃうなんて、うまいこというよなあなんて思ったのは皆には内緒だ。まあ。そんな寒いギャグ共有できるような友達も居ないけど。

引きこもりの僕は真剣な視線一つとその他大勢の奇異の視線に曝されながら、立ち尽くすことに全神経を集中させた。

ーああ…足が震える…（涙目）

召喚されて　？エンターキーを押した覚えしかない？

外の世界に出るのなんて、正直、もつとずっと先だと思ってた。
おとぎ話みたいに、現実味をおびた気がしなかった。

今、自分の身の上に外の世界と言っても異世界、目の前に現実味
がありありと感じられる光景が広がっている訳なのだが…

知らない人が居る。

その後ろには、知らない人達が居る。

一人だけ前に出ているのは十代後半ごろの女性。彼女を遠巻きに
するように、数メートル離れたところで帯剣した男達がこちらを伺
っている。

女性は袖の膨らんだドレスを着ているが、色合いも加えてとても
質素な出で立ちだった。頭には飾り一つなく、くせ毛のようなゆる
いウェーブのかかった金髪を、後ろで一括りにしている。束からも
れた金色が、気まぐれに吹く風に揺れていた。

男達のうちの数名は金属の光沢がある兜をかぶり、あるいは、胸
当てや籠手、そして具足ののようなものを身につけている。中には皮
や布でできた防具を纏っている者もいる。統一という文字が見当た
らないそれらの様相に、どこか草臥れた雰囲気漂っている。

僕はそんな彼らを、まるで上空から見下ろしているような位置に
居た。

？まるで？

無意識に浮かんだ言葉を意識する。

足下に視線を落せば、地上は少しだけ遠い場所にあった。僕の距離感が正しければ上空約15メートルといったところだろうか。マンション3階分の高さから見下ろしているような感覚だ。混乱ついでに視界を広げてみれば、何か大きな影が大地に落ちている。慌てて上空を見上げるも、薄い雲が遠くに見えるくらいでその影を作るような遮蔽物など見当たらない。

キーボードの上にあったはずの両手の指の間を風が撫でていき、僕はそつと両腕を体の脇に降ろした。

異世界召喚。

脳裏にその言葉が思い浮かぶ。

時間潰しに読んでいるネット小説でよく目にする言葉だ。

ファンタジー小説の異世界召喚といえば、神殿の魔法陣の中や祭壇の前に現れたりするところだろうが…これといってそういったものも見当たらない。

夢オチを期待するも、あいにく僕はこんなに臨場感溢れる夢など見たことがない。期待するだけ無駄なような気がしてくるというものだ。

一見して目の前の彼らがすぐにこちらを害せるような状況にないことから、思考は落ち着いているように思われるが、体は正直である。

実に8年ぶりに目の当たりにする群衆。そして彼らの視線の熱さに、僕の体は震え始めていた。

たくさんの人を前にして掻き乱される心。どうしようもない嫌悪感と恐怖感。この震える心と足のことなど彼らには到底、理解できないだろう。

やっと思い出したように、堰を切つて後から後から溢れてくる思考の濁流に、意識が流され、かき消されてしまいそうになる。

僕は潤み始めた目元を彼らに悟られないように、拭おうとする欲求を必死に押さえ込む。

誰一人、物音一つ立てない不自然さに精神が限界に達しようとしたときだった。

「メル・シャンテ殿」

女性の後ろに控えていた男達の中で一番年高く見える武人が、低い声で何かを促した。それを切掛けに、彼らの視線が一気に彼女へと注がれる。

彼女はそんな男達のどこか期待のこもった視線をもろともせず、ただ静かに僕を見つめていた。

そして、ようやく口を開いた。

「カラシナ様。わたくしは貴方様の血脈と盟約を結ぶ、メル・シャンテの血族の長。ルル・メル・シャンテと申します」

そう言つて丁寧に膝を折り、頭を下げる。

数秒経過して顔を上げた彼女の真つすぐな視線を受けとめきれなくて、僕はそつと視線をそらした。

？声と態度でわかるんだ。

彼女からは真面目に生きてきた人だつてことがひしひしと感じられるオーラが出ていて、僕の目には眩しすぎた。8年も引きこもっているような後ろ暗い歴史を持つ僕に、直視なんてできるわけがない。

「此の度は急な召喚に承えて下さり感謝いたします。此処は貴方様の世界と界を逸する異界でございます。わたくしの願いはこの命の尽きるまで、貴方様をこちらに召喚し、助力を得ること。世界の制約に従い、対価として貴方様の望むものを差し出すことをここに誓約いたします。了承の証としてカラシナ様のお名前を頂きたいのですが…」

ガクガクいつて収まらない足を激励しながらやつの想いで立っている。そこへかけられた言葉はほとんど理解できなくて。最後のほうの「お名前を」という音に頭は反応するものの、声がかかかたで思うように答えることができなかった。

場に再び沈黙が訪れる。

「メル・シャンテ殿！」

わずか数分を我慢できない男達がざわめき始める。

「貴女の召喚の儀のためだけに前線に立つべき精鋭達を引き抜いてここまできたんだ！ここで“カラシナ”を手に入れられなかったら我々は一体何のために！！」

怒り、早口でまくしたてるようにその男は叫んだ。

続けとばかりに、次々と男達が口を開く。

「だから私は反対だったのだ！メル・シャンテ！堕ちた王族の小姑娘などを頼るなんてな！」

「しかしこうして召喚には成功しているじゃないか！」

「だが本当に成功したのか？これは本当に“カラシナ”なのか？聖戦で私が見た時は“漆黒”だったのだぞ！これは“褐色”じゃない

か！」

褐色。

耳がその音を捕えた。

そうだ。

僕の髪は生まれた時から茶色なのだ。それも艶のある。だから茶色というより銅色あかがねいろに近いかもしれない。それは生まれつき黒髪の人種が殆どを占める小さな島国において、異質だった。自分を取り巻く環境に違和感を覚えた時、茶色に染めていたものを黒に戻したというポーズのために、この髪を黒く染めることを始めた。それは大学生になるまで…僕が世の中からフェードアウトするまで続いた。こもってからは長さが鬱陶しくなると自分で切るようになり、髪型は何年か前から茶髪のざんばらで落ち着いている。

他にも気になる単語がちらほらと耳にかかったが、突っ込む気にはなれなかった。

そうしてしばらく、ぼんやり過去に意識を飛ばしていると、急にざわめきの空気が変わる。後方の何人かはしきりに自分たちの背後を気にして振り返っているようだ。

「隊長！！！！たった今、ルンガから召喚士オリヴィアが戦線離脱し、こちらの方へ向かったとの報告が…！！」

？戦線離脱？まさかこの世界、戦争でもしてるのか？

小さな紙を掲げて、初めに声を上げた年長の男へと部下らしき人物が歩み寄る姿が見えた。

「おい待て！地平線に何か見えるぞ！！」

急激に意識が戻される。

「……………うつ！」

「うわあつつつ！！！！」

「オオカミ！オオカミだあつ！」

「あ…あれは“炎狼”と“水狼”…“サキミヤ”かつ！」

叫ぶ彼らの視線を追えば、地平線に点のような何かが見えた。それは段々大きな点になり、揺れ動く影になり、サキミヤ、と誰かが呼んだ頃には巨大な四足の獣の姿がしつかりと見て取れた。

二匹のオオカミ——もちろんそれは僕の足下に遠く及ばない大きさではあるが、人間2、3人分…4、5メートルはありそうだし——はこちらの姿を捉えると徐々に減速し、彼女と男達を間に挟むようにして僕と対峙する。

パニックを起こす男達には目もくれず、彼らはどうもこちらを伺っているようだった。

？普通のオオカミがこんなに大きいわけないよね。それに一体どれほどのスピードで走ってきたんだ？地平線からここまでつて…いくらなんでも速すぎだろ…？

他の誰かがパニックを起こすと、対して冷静になれる人間が存在する。僕はどうやらそのタイプのようだった。

ただ、呆気にとられてことの成り行きに身を任せていると、驚くべきことが起きた。赤色のオオカミが遠吠えをしたかと思えば、あごを下げて首を左から右へと一閃。その口からゴウツ！と炎が吹き出して、あっという間に地上の彼らを炎の柵で囲んでしまったのだ。輪をかけて動揺する男達。

そこに冷えた声が聞こえた。

『…オリヴィア、離して』

青色のオオカミが背中に乗せた少女を疎ましそうに見上げている。少女は焦げ茶の髪をなびかせながら、しぶしぶといった感じで彼の背中からずるずると這い落ちた。そして地上の男達へ向かって言った。

「わたし、オリヴィア・ヴォーンズ！ “サキミヤ” の召喚士よ。 “霸王” の召喚を阻止しに来ただけど……」

くすり、と邪気なく笑い。

「契約はできてないようね？」

その言葉に男達はグツと押し黙る。

他に解釈のしようがない、明らかな肯定だ。

不意に、赤と青の毛並みの二匹のオオカミがこちらを見上げて言った。

『オレ、崎宮^{さきみや・あると}在人^{ゆいつと}。こっちは有人^{ゆいつと}。高一だぜ。初めましてだな』

僕がその名を認識すると、彼らの姿は人のそれに変容していく。黒髪に茶色の目。典型的な日本人のそれだった。

いきなり話をふられたことよりも。

口から火を吹くオオカミが人の姿になったことに驚いている僕に向かつて、在人はごく軽い調子で問いかける。

「で、あんたは？」

？僕は、エンターキーを押した覚えしかないんだけど……

なんだろう、この状況…

召喚されて　？エンターキーを押した覚えしかない？（後書き）

この小説はフィクションです。

主人公が住んでいる場所は地球の日本という設定ですが、似たような異界だと思って下さい。登場人物の姓名に常用漢字以外の漢字が使われる可能性があります。

守勢の僕　？平和の国の生まれなんだ、戦えるわけがない？

永らく他人と会話することがなかったから、僕は言葉を発することを忘れてしまったみたいで………声が、出てこないんだ。

『オレ、崎宮^{さきみや・あると}在人^{ゆうと}。こっちは有人^{ゆうと}。高一だぜ。はじめましてだな
僕がその名を認識すると、彼らの姿は人のそれに変容していく。
なるほど。』

なぜ苗字が一つしか紹介されなかったのか。これは説明されるまでもない。

彼らは紛れもない兄弟——^{ふたじ}一卵性双生児——だったのだ。

「で、あんたは？」

驚くことだらけで終始無言の僕に対して軽く問いがかけられる。
だいたい、ほんの少し前にエンターキーを押した覚えしかないというのに、どうして中学を卒業したばかりのような未成年に詰問されるような事態に陥っているのだろう。

段々自分が情けなくなっていく。

「にしてもすげーなあ、あんた。こういうのを見ると、さすが異世界だよな」

答えないこちらをまるで気にすることなく在人は語る。

「ドラゴン相手に狼の俺達、勝てると思う？」

兄弟の声に隣の有人はフルフルと首を横に振る。どうやら彼の方は寡黙な部類に入るようだ。興味津々な在人をよそにどこか気怠げな有人。冷静と情熱の…と、ある本のタイトルの冒頭が浮かんだところで、なるほど、赤と青の組み合わせはそういうことなのだろうかと推測する。

？それにしてもどうして狼が人間に？いや。元々人間だったのが異世界効果で狼に変身できたのか？

黒髪茶目の見た目に高一という言葉から明らかに日本人な彼らの登場で、いくぶん僕にも余裕がではじめていた。

足はまだちょっと震え気味だが、同郷を前にして、異世界召喚という超常現象と群衆に対する恐怖感は多少薄れてきたようだ。

？あと、どうやって火なんか吹いたんだ？？

あれか？ファンタジーの鉄則ってやつなのか？と、妙な方向に話を落してしまいそうになる僕を引き戻すかのように、オリヴィアと名乗った少女が声を張り上げる。

「あー！もう！ユウトはいつもやる気なさすぎ！見た目と力は必ずしも一致しないって何度説明したらわかるのよ！契約してない召喚獣なんて怖くないの！」

それに、と子供のくせにニヤリとした笑みを浮かべて。

「“カラシナ”は好戦的で冷酷な生き物よ。気に入らなかつたら味方の城だって破壊するんだから。現にこうして召喚士が気に入らないから返事も返してないじゃない」

「いやいやいやいや！ちょっと待って！それって一体どんな設定ですか！？」

“カラシナ”の僕は絶句する。

好戦的で冷酷？引きこもりの僕が？？って話だ。

それに、返事を返してないのは気に入る・入らないの問題ではなくて…声さえまともに出せないほどヘタレなだけなのに。

？反論すらできないなんて。ほんと、情けない…

自分自身がいたたまれなくて、体がどんどんしぼんでいくようだった。下に居る群衆にばかりフィルタをかけて、たった一人、僕を呼んだ張本人を力なく見下ろした。

？この世界…いや、国か？

とにかく此処では今、戦争が行われているらしいね。

召喚士と召喚獣、それに、契約？

…ねえ、どうして僕なんか召喚しちゃったの？君が命をかけるほどの価値が、僕にあると思う？

「メル・シャンテ殿！」

また、男が叫んだ。

焦りのような、責めるような、どこか期待するような。いろんな色の混じった声だった。

対して。

力ない僕を澄んだ瞳で見上げて、彼女は、安堵したような、まるで悟りを切り開いたかのような穏やかな笑みを浮かべていた。その口が開く。

「問題ありません。叔母さまの時は承諾を得るのに一日を要したと聞いています。カラシナ様は知に優れたお方。どうぞ存分にご考慮ください。わたくしが貴方様を召喚する者として相応しいか、お確かめください」

衝撃だった。

そりゃ、もう全部が。

なにより声がきれいで…。

本当に、きれいな人だと思ったんだ。

見た目が、っていう訳じゃない。

なんていうか…内面とか心とか…それとも少し違うように思うけど、そういうものがとても澄んでいるような気がした。

崇高…うん、それに近いかな。

とにかく彼女という存在はその時、僕にとって最高に崇高だった。

僕たちはまた無言のまま見つめ合う。自分とは何もかもがかけ離れた彼女から早く目を逸らしてしまいたいのに、彼女の瞳がそれを許さない。

その金色の髪が炎の風に煽られて、揺れた。

「時間はたっぷりあるみたいない方だけど、わたしたちのこと忘れてない？アルト！」

「なんだ？」

「何だ、じゃない！攻撃よ攻撃！カラシナがあの子と契約する前にあの子を殺すのよ！」

「え…？殺す？殺すって…この子を？」

赤い色が視界の端に揺らめいて、僕の世界が再び鮮やかな色を取

り戻す。

少しだけ周りの状況を把握した後、すぐに自分の殻に閉じこもってしまいたくなる僕と、そんな僕を邪魔するこの異世界との戦い。それを繰り返しながら、少しずつではあるが、着実に僕の意識は内側から外側へ引きずり出されていく。

余裕の笑みを浮かべて少女が放つ言葉に、在人はどこかうんざりしたような顔をした。

「聞いた？ 有人。子供が殺すとかって世知辛い世界だよなあ、ここ」

日本じゃ考えられねえ、と彼は続けて盛大なため息を吐いた。

僕からしたら崎宮兄弟だってまだ子供のうちだけど、自分は大人だ！なんて胸をはっていえる立場にないことくらい重々承知している。

ここで幸いなのは、在人が“まとも”な思考の持ち主であることだろうか。

「しょうがないか。現実だけどゲームみたいな世界だもんな、ここ」

途端、在人が胸の位置まで上げた両手の間に赤い炎の渦が現れた。

「え、それ、どんなマジック…？？あ、いや、“魔法”か？

僕の目が点になる。

「有人の出番なんかないぜ とりあえず、炎の竜巻みたいなやつ！」

燃え盛る炎を右手に持ちなおして、ドッチボールを投げるようにそれを群衆の頭上へ放り投げる。

「カラシナさん、だっけ？呼ばれて早々悪いな！異世界楽しみたかったかもしれないけど、あの人死んだらあんだ日本へ帰れるからさ。変な夢でも見たと思って忘れたいよ」

そう言つて在人は器用に指をこすり合わせる。

それが視界いっぱい、一秒の駒送りのように映った。

？待つ…！

上空に放り上げられた小さな炎が爆発する。四方に飛び散った炎の筋が生き物のようにうねって中央に寄り集まり、炎柱を形作る。渦巻いたそれは地上の彼らを飲み込むように落下していった。

？そんな威力の火を撒かれたら、人なんか簡単に死んじゃうだろ！？

僕の心の叫びと同時に、竜巻みたいな炎は地上の彼らの一切を飲み込んだ。

息を飲んで見つめるだけの僕と、楽しそうに笑う小さな女の子。目前で燃え盛る炎はまるで、この異世界の狂った人々の有り様を示しているようだった。

余りにもあっけなく命が摘まれるその様は、僕の心を深く落していく。

？どうしてこんなことを…

ただ。

ほんの少し。もう少しだけ。

彼女の声を聞いていたかったと…思う。

それは小さな、本当に小さな僕の望み。

人と関わることを諦め、放棄した僕が久しぶりに抱いた他者への

興味。

「あんなにきれいな子が、こんな簡単に死ぬなんて… おかしいんじゃないの？ どう考えたって、僕なんかよりずっとこの世界に必要な子でしょ？」

目のあたりに水みたいなものが浮かんで来る。

「僕が召喚獣で、彼みたいなファンタジーでチートな能力が貰えるんだとしたら… ねえ、神様。こんなクズみたいな僕の命なんかいいからさ。あの子のこと、助けてよ…？」

けれど世界は沈黙したまま。

無力な自分がほんとうに嫌になって、僕は顔を背ける。

見えてなかった大地が… どこまでも続く荒涼とした大地が、遠くから物寂しい風を運んで来る。一本の樹木すら見当たらない乾いた土色の景色に、戦争がもたらす不毛な結末が思い描かれた。

ネット小説の救世主のように、こんな世界を引きこもりの僕がどうにかできるなんて端から思ってたなどいない。ただ。

「僕は無力だけど… ここに呼ばれるような力が何かあったんだとしたら…」

『… 君を助けたかった』

呟いた小さな声は誰の耳に入ることなく虚空へ消えた。

「よしっ。任務完了！ さ、帰ろっ？」

子供の澆刺とした声が耳に届く。
視線を足下の炎へ戻すと、ゴウツ！と風が吹き抜けた。
目から水が零れたかどうかというところで、不意に上向きの力が
地上の炎を押し上げる。

？……………？

「……………生きて、る？」

誰かが声を発した。

目を凝らすと、僕を呼び出した彼女と彼女を取り巻いていた男達
の姿が、かき消されて行く赤の間から少しずつ現れる。

？あ…

「な…なんで？契約、してないんじゃないの？」

狼狽えた様子でその少女、オリヴィアが呟き、それを聞いた僕は
もつと狼狽えた。彼女達を守ったのが自分だなんてとても信じられ
ないけれど、他に彼らを守ろうとした存在はここには居ない。

？僕何かしたの！？

「すげーぜ、カラシナさん。未契約でオレの力をかき消すなんて！
今の見たかよ、有人」

「バ…バカっ！アルトのバカっ！だから“カラシナ”は特別だつて
言っただのに！早くやつつけてよ！」

「…んなの聞いてねーし。ったく、むちゃくちゃなお子様だなあ…
ま、でも同族相手にすんの久しぶりだしな！よし、やるか！」

?!?

混乱も束の間に、頬を火の塊がかすめていった。

「よそ見していると当たるぜ？」

？な…なんっ…

声の主を見れば、不敵な笑みを浮かべている。

彼の周りにはいくつかの炎球が浮かんでいて、飛んで来たのはそのうちの一つのようにだった。

？いつの間に！？これって無詠唱とかいうやつなのか？？でもさっきは「竜巻」とか言ってたような…？

そもそもこの異世界における魔法のようなものと、それを発動せしめる呪文とはどんなものなのだろう。そして僕が使った（らしい）魔法とは何だったのだろうか。

脳みそが即座にクエスチョンマークでいっぱいになったが、在人はそれが解消されるのを待ってはくれない。

「的が大きいとそうそう外れないから助かるぜ、野球部で鍛えたオレの豪速球受けてみる！」

「…ベンチのくせに（ぼそっ）」

「……黙ってる文化部」

いきなり突っ込む有人に苦い顔をしながらも視線を外さない在人が戦いというものに慣れているような彼らの雰囲気、嫌な汗が噴き出してくる。

「とにかく、やるぞ！」

意気込んだ言葉の次には迫り来る炎の球。

？うつ！

思わず僕は右手で顔を隠すようにして、それを受け止めようとした。怖くて目を閉じていると、風船を投げつけられたような感覚が腕に届く。

―熱…く、ない…？

それに、痛くもない。

おそろおそろ目を開いて状況を確認する。

何か柔らかいものが当たった気がする右腕をひねって見ても、火傷の痕どころか何の痕跡も見当たらない。

？？？？

「くっそ…鱗のせいでノーダメージかよ。ずりいよ、それ」

「…まあ、ゲームだとドラゴン形態の召喚獣って最後の方で手に入られるやつだもんね。それなりのMP削って召喚するし、強いのが当たり前じゃない？たぶん親戚なんだろうけど、前に召喚されたカラシナさんが“覇王”って言われてるくらいだし。メル・シャンテさんが生きてるって話になった時、あの人、すぐに殺せて命令したくらいだから」

「体中鱗なんだぞ。どこ攻撃すりゃいいんだよ？」

「目とか口…って言いたところだけど、在人はコントロール悪いもんね。そうだなあ。誰から魔力を貰ったのかわからないけど、一

番確實そうなのはやっぱり召喚士を攻撃することかな。これまで無言であの力だしさ。アドバンテージがかなりあるんだと思うよ」

「有人君、話し始めると長いんだね…そして僕より冷静で頭が良いようで…なんか戦争の情報にも通じてそうだし…異世界召喚された親戚って……いや、その前に攻撃されそうなあの子、守らなきゃいけないよね？でもどうやって？」

僕は崎宮兄弟が話し込んでいる隙に無い頭を必死に動かそうとするけれど、どうすればいいのか余計にわからなくなる。

？そもそもさっきのは何だったんだ？

「在人、召喚士を狙って。オリヴィアが居るから、残りの男達も忘れないでね」

「ユウトってば…いざとなったら優しいんだから」

「お前は？」

「援護する」

「…うしっ。わかったぜ」

最後にアイコンタクトで何か会話があったようだが、当然、他人の僕にはわからない。オリヴィアという名の少女はそんな彼らの側でにやけながらどこかにトリップしているようだが、二人の意識の中には既に存在しないものようだった。

「行けっ」

？うわっ、ちょっと、まだだめ！それ、だめだつてば！

予備動作に入った彼に、心の中で思いきり待ったをかける。…当

然、待つてなんか貰えないんだけど。

かざした手のひらから炎が勢いよく吹き出したのを見て固まっている、目の前に何か鋭利なものが迫っていた。

反射で顔を逸らせる。

？あぶなっ…何だ今の！？

「…動体視力までいいのか」

見下ろせば少年の冷たい目が光る。

「うわあああっ！！！！」

叫び声にハッとしてそちらの方を向けば、在人が出した炎が逃げ惑う幾人かの男達を飲み込んでいるのが見えた。せめて彼女だけでも守らなければと意識を切り替えるも、視界の端に再び現れたそれに集中力が削がれる。寸でのところで躲すが、次から次へと僕の間を狙っているであろう攻撃が続く。

？考えろ！どうやったらさっきみたいなことができる！？

目を守るように腕をかざして強く想う。

？有人君はどうやって僕に攻撃してるんだ！？思い出せ！

在人も有人も、難しい呪文めいた言葉を話していた記憶はない。初め、在人が「竜巻」と言ったらそれらしい魔法が発動した。次に彼は無詠唱で火の玉を複数出すのをやってみせた。僕は呆気にとられてそれらを見ているだけだったが、最初の攻撃の時に彼女を「助けない」と思った気がする。そうしたら何かよくわからないけれど、

彼女達は無事だった。次の火の玉は僕の鱗（↑なんだそれ？）に当たって消えた（らしい）。

？呪文とかは必要ない？“何か”言うだけ？あとは“思う”？……
…あ。もしかして、思えばいいだけ？

氷塊が飛んで来るのを気配で悟った僕は、その前に腕をかざして「来るな！」と思う。

すると、氷塊は僕の体にぶつかる前に何かに弾かれ飛散した。

？……上手くいった…けど、そんな単純な…

念のためにかざした腕が不必要になって、なんだか手持ち無沙汰になる。…いや、そんなことなかった。有人がその隙さえ逃さず攻撃を仕掛けてきたのだ。

？有人君、容赦ないね…（涙目）

ほんの少しだけど勝手が分かった僕は気を取り直し、散り散りになつてしまった地上の彼らを見下ろした。彼に邪魔されないように「攻撃あたるな！」と思いながら、僕を召喚した彼女を探す。彼女は両隣を固められ、男達に引きずられるようにして逃げていた。

？見つけた！ええと…あの人達を守りたい！

そう思うと同時に、吹き付けていた炎が何かに遮られるように彼らの周りだけ途切れた。

その光景に疑問符が浮かんだであろう男達はそのまま怪訝な様子であたりを見回していたが、彼女はすぐにこちらを見上げ、驚いたような顔をした。

「メル・シャンテ殿のところへ走れ！そこなら炎から守られる！」

逃げ延びた幾人かの男達が我も我もと彼女の元へ走り出す。

？…よかった…間に合った…

「有人！なんかバリアみたいなもの張られたぞ！」

「…うん。こつちも当たらない」

「どうする？」

いつまた攻撃されるかと内心ビクビクしている僕は、ずっと「攻撃当たるな、彼女達を守る」を心の中で繰り返していた。他にどうしたらいいかわからないから、ひたすら守りを固めることしかできない。

「こうなるとどちらの魔力が先に枯渇するかの勝負になるのかな」

「オレ、あと少ししかない」

「…相変わらずペース配分下手だね」

「常に全力の方がカッコイイだろ」

得意げに話す在人をどこか疲れた目で見つめる有人。

いつもの僕なら、まあそんな兄弟もいるよね、くらいの感想を持つところだが、そう思えるほど心理的な余裕はなかった。

お互いに沈黙し対峙する僕らの間を、やや冷たい風が流れていった。僕は彼女から視線を外して、崎宮兄弟の出方を伺う。

どちらも動かず、相手を見つめていた。

幾許かして、オリヴィアが小さく声を漏らす。

『よう。崎宮ブラザーズ、何もたまたやってんだあ？』

背中を冷たいものが流れた。

その声と言い方からして、とても苦手な部類の人だと即断する。

声はすぐ後ろから聞こえた。崎宮兄弟にばかり注意が行って、彼らの援軍に易々と背後を取られたようだと悟る。

ところでこの異世界、召喚獣同士の殴り合いってアリなんだろうか。

そう思ったらなんとなく意識が遠のいていくような気がした。

？肉弾戦に持ち込まれたら死ぬな…

自己防衛なら得意　？安心できる場所は自分の殻の中だけ？

どうかお願い。僕の聖域に入って来ないで。僕を放っておいてよ。

ヘッドホンをして音楽を聞きながらその時気になったことを検索。後は小説を読んだり動画を見たり。

ニユースも見ることから一応世の中がどう動いているかは何となくわかる。

掲示板でたまに、あ、仲間な人？って思う書き込みを目にするけど…考え方が微妙に違うから滅多に共感はできない。

批判なんてしない。肯定もしない。

自分から反応を返すことなんてするわけがない。

僕はずっと受動のまま。ここしばらく、自発的な行動なんて起こしてないと思う。

…だから、異世界効果ってすごいな、なんて思ったり。

戦争と聞いて何が思い浮かぶかと問われれば、残酷、の一言。

在人君が放った炎は幾人かの男達を飲み込んで、そのまま灰にしまった。これも“異世界効果”って言うのか、僕の視力はものすごいことになっている。見ようと思えばかなり遠くまで、あるいは微細な場所まで見えるということに気づいたのは、メル・シャンテさんの瞳の色が緑色だったから。

普通マンション3階ぶんの高さから人を見下ろしたら、瞳の色まではわからないでしょ？…なんか、ごめん。僕の場合は見えないんだよ。

まあ、そういう訳で彼が人を灰にまでしてくれたおかげでグロイ光景を見ずに済んでちよっとほっとしている。焼死体を細部までつ

ていうのは繊細な自分には充分拷問だ。もちろん小心者で感化されやすい僕は、人があつけなく死ぬ…もとい、自分と同じ世界の同じ国の人が簡単に他者を殺すっていう場面を目にしまったことに、少なからずショックを受けている。

一方で「ああ、なんて残酷なんだろう」とどこかヒトゴトのように思っているのもまた事実だ。

だってここは異世界だから。

異世界、だから。

それに今更だけど“召喚獣”って呼ばれるのは変な感じ。僕は“人”なのに。人のハズだけど…崎宮兄弟は最初オオカミの姿だったし…そうすると、僕たちはやっぱり召喚された“獣”なんだろうか。

「丈也さん…」

気のせいかな、在人がほんの少し引きつった笑顔を浮かべていた。有人のほうに至っては見て見ぬ振りだ。静かだが確かに発せられていた殺気のようなものも、今はなりを潜めている。

対して僕の方は嫌な予感がひしひしと…ちよつと違うな。…びしびしと…いや、ばしばしの方が上か？…とにかく痛いくらいに、ものすごく嫌な予感に汗を滲ませていた。

できることなら振り返ってその恐怖の原因を確かめたい。

でも怖い。

でも。

『コレが“霸王”か？』

丈也と呼ばれた男が誰かに問いかける。

「聖戦の時に現れたものとは別個体のようだが、この姿は確かに霸王・カラシナだ。召喚獣は武を以て力を知らしめるものではないから、正しくは“魔”王…いや、王の中の王、“魔皇”と言うべきか」

それは無機質な男の声だった。

とても冷たい…凍えるような、感情の欠落した音。

そこに確かに存在するはずなのに、亡霊の声を聞いたような気さえしてしまう。

『へえ…俺、若い時、頭やってたんだよね。霸王なんて聞くと殺りあいたくなるなあ』

—なんて不吉なことを…

異世界で“霸王”なんて二つ名貰った親戚つて誰だよ！？と心の中で叫ぶ。半分罵倒に近いかもしれない。

小さい頃、父親に連れられて家の方に一度だけ行ったことがある。大人達の話が終わるまで子供同士で遊んでいればいいと言われ、本筋の従兄妹達と顔を合わせる機会があつた。その出会いを一言で言うのなら「最悪」。多くの才能に恵まれ自信と自尊心に満ち溢れた彼らは、普通枠に収まる僕にとって理解不能な存在だった。

“これまでに貰った賞状の数”についての話を聞かされつつ、廊下の端から端まで並べられたそれらの見学ツアーに連れられた時は、もうほんとにどうすればいいのかわからなかった。ねえこれって遊びなの？？と問いかけることもできずに、へえすごいね、なんて決まりきった言葉をかけながら過ごした記憶がある。

他には「君は何枚？」「1枚だよ」「何で貰ったの？」「運動会だよ」「一等賞のだね、僕も持つてる」「…いや、五位のだけど」「え、そうなの？それしか持ってないのかい？」「なんて会話があったな。子供心にちよつとやな奴だなと思つたよ。」

兄も兄だが、妹も妹だった…って、もうやめとこつ。

顔も頭も運動神経も良いのに性格に難ありな従兄妹たちを思い出
し、霸王か、まあアリだな、と僕は心の中でため息を吐きながら思
う。

聖戦っていうやつがいつあったのかは分からないが、それがだい
ぶ前で彼らの親世代だと言われても“霸王”はアリだ。本筋の人達
じゃなくても親戚一同揃ってアリな雰囲気だから、余計、誰だよ！
？って話だ。

…わかってるんだ。

こんな平凡な僕だから、普通に嫉妬くらいする。
彼らにその気がなくなつて、比べられてダメな方だと思われたら
それだけで嫌な気持ちになる。

あの人達にはそれが分からなかったんだ。

不吉ついでに現実逃避で、僕はイジイジし始める。

半ばヤケで、自分の殻に閉じこもるように地上の彼らを巻き込ん
で、重厚でどんな力も通さない丸い防護壁みたいなものを想い描く。
そして、目を閉じて一切の意識を内側に向ける。

—どうとでもなれだ。もう何も見ない。声も聞くもんか。

『戦っていいか？』

遠くの方で何か聞こえた。

でも、何を言っているのかよくわからなかった。

「好きにしろ」

『うっし。んじゃまあ試しに…グングニル！』

誰かが叫んだ後に、ぼてっ、とチヨークが頭に落ちてきたような、ごく軽微な感覚があった。

僕は痛くもかゆくもなかったから、それを無視した。

『すつげえ！オーデインの槍先が跳ねたぞ！見たかよ今の！？』

「……そつすね」

『おいおい在人、反応わりいな？しょーがねえ。たぶん槍だから弱かったんだよ。槍って金属の刺さる部分が小さいもんな。見てろ。次はミヨルニルだ！』

少しざわめきがあった後、発泡スチロールのトレイが頭に落ちてきたような感覚があった。お惣菜とかがのつてる、面が広い感じのアレ。効果音にすると「パサッ」。

僕はちよつと鬱陶しい気分になったけど、なかったことにして忘れることにした。世の中、気にしたら負けだから。

『マジか！棒が取れたぞ！？』

「……………柄ね」

「丈也さん、今日は北欧神話攻めなんすか？」

『おうよ、カッケーだろ？インターネットで調べてきたんだ。カミサマの武器だと強そうなイメージだしな。攻撃の種類は多い方が良いと思ったんだ』

「なーる」

『しっかし、慣れないことはするもんじゃねえな！全然ダメージないもんな、霸王』

「オレらの攻撃も当たりませんでしたから。相当守りが堅いつすよ“カラシナ”さんは」

『守りが堅いつつても無尽蔵なワケじゃねえだろ。俺だって“クチノキ”と張れるくらいの力持ってた。いつも通りのヤツで潰し

てやんよ』

誰かがまた何かブツブツ話してるな、と意識の遠いところで思う。

—でも僕には関係ない。

見たくないものは見ない。

聞きたくないものは聞かない。

自分さえ守ればいい。

ただ、今だけは、あの子のことも守れれば。

僕は“召喚獣”だから。

戦い方なんてわからないけど。

とりあえず痛いのは困る。

仕組みはよくわからないけど、魔法っぽいものは使えた。

召喚獣は武を以て力を知らしめるものではないと、おそらく丈也という人の召喚士が言っていた。たぶん、殴り合いはナシなんだ。

つまり召喚獣は魔法が全てなんだと思う。

魔法を使えば人を殺すことだってできる。その気になれば、きっと、僕にもできるのだろう。

じゃあ、召喚獣同士が戦ったら負けた方は死ぬのだろうか？
だとしたら、それは困る。

—……………困るって？僕がそう思うんだ？？

ぼんやりしていると、ほんの少し、フワツとした何かを感じた。

『アメノサカホコ・コンゴウホウシヨ』

死ぬのは困ると思った自分が信じられずに、閉じていた瞳を開ける。

両手を持ち上げて、握ったり、開いたり。

生きてるってこういうことだよね？と確かめるように、その動きを目で追う。

『サジフツノカミ・ミカフツノカミ・フツノミタマ』

地上を見下ろせば、相変わらずざわめいている男達の姿。

その側には僕だけを見つめるメル・シャンテさんが佇んでいる。

『アメノハバキリ・フツシミタマ・オロチノアラマサ』

―君は、生きてるんだよね？

心の中で僕は彼女に問いかける。

彼女の瞳が揺らめいて。

ええ、貴方も。

と、幻聴が聞こえた気がしたから。

『アメノムラクモ・クサナギノツルギ！』

フツと意識が上空に向いた。

何かの気配を感じて。

僕が願った守りの球が、光の波紋を映していた。それはたゆたう力の軌跡。

その揺らぎの外側に、幾本かの刀身が見えた。

『終わりだ』

ゆつくりと声の主を振り返る。

ニワトリに似た紫色の巨体に、白いトサカ。背中には翼が生えており、尾の方は鱗に覆われ、腹から下はまるで爬虫類のようだった。

—なんだ…これ…？

その異様で不気味な姿に後ずさりたい衝動に駆られたが、良くも悪くも僕の体はぴくりとも動かなかった。

『貫け！』

怪鳥から丈也と呼ばれた男の声が響く。

瞬間、僕たちを取り囲んでいた剣が次々と襲いかかって来るのが見えた。

こんなことなら見なきゃ良かったと思っても後の祭りで。

死ぬ時は死ぬんだから、怖いなら目を閉じたまま受け入れればよかったんだと思って、これはもうどうにもならないことだから。

気にしてしまった僕の負け。

だけど本心が叫ぶんだ。

—こんなところで、死にたくない……死にたくないんだ！

守護衝撃　？これがどうやら僕の力？

知らなかったんだ。

外に出るくらいなら飢えて死んだほうがいいって思ってたのに。
いざ死ぬかもしれないって状況に立たされたら、どうしたって生きていたいと思うなんて…。

僕は弱い人間だ。

そしてダメな人間でもある。

だから、異世界召喚なんて夢みたいなことに巻き込まれて、頭ではアリエナイと思っっているのに、心のどこかで嬉しいと思う自分がいたんだ。

あの世界で僕は不必要な存在だった。

でも、この世界には必要としてくれる人がいる。

誰だって「いらない」って言われるよりは「いる」って言われた方が嬉しいから。

だけどそんな気持ちの問題を語るより、この状況はもっとずっと深刻な問題だ。

『貫徹っ！』

死ぬのかな？

視界に映った鈍色の刃から目が離せず、自由にできない体の重さを遠くに感じながら、僕は漠然と思った。

異世界で死んだらどうなるの？

そんなの死んでみなけりやわからないだろうに、心のうちに急速に広がった波紋は体という枠にぶつかって次々と干渉していく。真逆の思いは打ち消され、同じ思いは増幅されて強くなる。

そして最後に残ったのは、死にたくない、という気持ち。

？嫌だ！嫌だ、嫌だ、嫌だ！こんなところで死にたくないっ！！

怪鳥が紫色の巨体を反らせ、羽開いて獣の咆哮を上げる。

『くたばれええっ！！』

絶叫に圧されるようにして刀身が閃光を発し、こちらをめがけて動き出す。

それを視界に認めた時だ。

ガラン、と脳裏で重い鐘が傾いた。

見開いたままの目がカラカラに乾き、ふちにじわりと湧き上がるものを感じる。

僕たちを守るたゆたう光の壁が、僕の心臓と連動するように脈打ち、波を立てていく。

一瞬の出来事が一枚一枚の絵になって視界いっぱいになり、その度に音が奪われていく様に狂気を掻き立てられるようだった。

ドクン、ドクン、と高鳴る胸の音が煩わしい。

ああ、これはよくある覚醒のパターンじゃないかと加速した思考の片隅で思っけれど。

そんなことはどうでもいい。

どうでもいいんだ。

ただ、今はそれを、止めてくれ。

頼むから。

『…黙れよ』

ゴーン、という重厚な鐘の音が脳内いっぱいに響き渡った。そのあまりの衝撃に意識が飛ばされそうになる。

僕は鈍器で撲殺されるってこんな気分なんだろうなと思いながら、守護壁から爆発するように発せられた衝撃波の一陣が宙に浮かぶ刃の全てをかき消していくのを眺めていた。

波が拡散するほどに静まっていく体には新しい感覚が一つ芽生えていて、誰に教えられずともそれが自分の扱えるものの一部だと確信することができた。

？これが、僕の力…自分を守るための……あの子を守るための、力…

生きようとする力とはこんなにも強いものなのだと、泣き顔がく

しやりと歪む。

『うそだろ…っ』

ややあつて耳に届く掠れた声。

『まだだ！まだ負けてねえ！！殴り倒せ！俺の相棒！！！！』

叫びに応えるように現れたのは、表面にアルファベットが刻まれた巨大な金属バット。持ち手から身にかけて微妙に弧を描いており、あちらこちらにかすり傷や凹みが見える。

あれが相棒なのかと冷えた心で焦りながら、加減がはかれない僕は迫り来る鈍器に対抗すべく持てる力の全てを解放した。そのとき脳内に浮かぶのは、やはり重い鐘が鳴るイメージ。

ゴーンという音と共に僕の球状の守護壁から発せられた衝撃波は予想を上回る威力で広まって行き、辺り一帯を次々とのみ込んでいく。

「きゃああああっ！」

下方から少女の叫び声があがった。あれはオリヴィアと名乗った少女のものだ。

「あーあ…」

なんとも気の抜けた声がした方を見れば、在^{ある}人が衝撃波にのまれて掻き消えていくところだった。え？と焦るも、彼は自分の体が消えていくというに全く頓着したそぶりがなく、後にはまるで初めから存在していなかったかのような空気が流れるだけだった。

『くっそ…今回は負けたぜ…アーヴィック』
「ああ。何も問題ない」

悔しそうな声がして、丈也じゅたと呼ばれた怪鳥の姿が一刻遅れて掻き消える。

そうして何が起きたのか理解できていない僕だけを置き去りに、異世界はシンと静まり返る。

混乱のままメル・シャンテさんを見下ろすと、彼女さえ驚きに目を見開いてこちらを見つめていた。

うおおおおお！！！と、そんな僕と彼女の間を引き裂くように、野太い歓声が大地に響く。

心地良いとは言い難いBGMだが、それを止める術はない。
彼女は煩い男達の歓声の中に居ても凜とした佇まいを崩さずに、そつと、そこに存在していた。その瞳が何か言いたげで、僕は思わず声を返してしまう。

『僕の名前は、からしな・ゆきと神嵐名行人…』

そう呟いた途端、彼女は花が開いたような笑顔を浮かべた、から。不覚にも、それに魅了されてしまつて…僕は、言葉を飲み込んだ。

ハッと気づけば、僕は部屋の中で立ち尽くしていた。

パソコンはスリープモード。

ディスプレイの電源が付いたままなのを知らせる赤いランプが目に入る。

？今、何時だ…？

不意に浮かんだ疑問を解決しようとキーボードのスペースキーを連打して、現れたダイアログボックスに半角小文字でパスワードを打ち付ける。

パツと射した明かりに反射で眉をしかめながら、見慣れた背景の隅に小さく表示されたそれを確認する。

時刻は午後3時過ぎ。

この世で一番きれいな青空を貼り付けた画面の光が、やけに眩しく感じられた。

参戦前夜　？世界は回る。僕だけを置き去りにして？

あるとき誰かが、君には尊敬できる人が居るのか、と聞いてきた。自分の親など尊敬に値しないと言い捨てたがための問いだった。???愚問だ。

もし私が尊敬の念を抱くとしたら、それは世界で初めて数えることをした人物。

数学という最高の学問ひまじょうしのきっかけを作ってくれた人へだろう。

暗い空間に銀色の模様???よく見ればアラビア数字の組み合わせにも見える???が浮かんた。

それは明滅を数回繰り返し、わずかな沈黙ののちに一際明るい光を放った。

光が止むと、誰も居なかったはずの寒々しい部屋に人の気配が生まれる。

踏み出された細い足は一切の躊躇なく室内を横切り、豪奢な取っ手に手をかけた。半分まわしたところで何かを思い出したのか、小さい口を開く。

「私。入るから」

言うだけ言うと返事を待たずにドアを引く。

「…久しぶりだな、カンナ」

銀髪の男が柔らかい視線をこちらに寄越してきたのを切っ掛けに、男の側で中腰の姿勢をとっていた侍女服姿の女が無言で一礼し、物

音ひとつ立てる事なく退出していった。

誰だろう、まあ誰でもいいか、と思ったところで男は革張りの椅子から腰を持ち上げる。

「あれは最近ジジイが雇ったオレ用の間諜だ。もつとも、兄のころからの二重間諜でもあるがな」

「ふーん」

「で、どうした？またあちらの生活に飽いたのか？」

ニヤニヤと笑みを浮かべていう男に一瞥をくれてやると、カンナと呼ばれた少女は「well, you know...」と呟き窓際のソファアへと体を埋めた。

男はそれを目で追いながら腹の高さまで持ち上げた左の手のひらを上に向けると、平面に魔法陣を出現させた。時を待たずにティーポットとティーカップ、それから皿に盛られた焼き菓子が魔法陣から生えてきたのを横目で見やり、二次元から三次元のを生み出すというこの世界の数学原理を疑ったところで、何もかもが馬鹿らしく思えた。ローテーブルにそれらが置かれ、自分が座るソファアの向かいに男が腰掛けたのを見て、少女はフイとそっぽを向いた。

「今日はずいぶん機嫌が悪いな？」

「何の連絡もなしに彼らが会いに来たの。おかげで集中力がきれちやった。もう少しでひらめきそうだったのに」

「それは災難だった」

男はわずかに肩をすくめたが、別段彼女を気にかける様子もなくティーカップを口に運んだ。

「飲まないのか？あのうすら馬鹿な王妃しか口にすることができない最高級茶葉だぞ」

そして、くすねものだがな、と笑いが続く。

カンナは眉間にしわを寄せたままティーカップを手にとると、味わうことなく一気に中身を飲み干した。

「味に寛容な国に住んできると、些細な違いなんかわからない舌になるのよ」

暗にそんなことよりも何か面白い話を聞かせると告げる彼女に、男はニヤリと笑みを返す。

「少し前にシャーレイの最後の王血が^{メル・シャンテ}“カラシナ”を呼び出すのに成功した。“カラシナ”は妨害に現れたマリゴールの“サキミヤ”をその場で下し、結果、召喚士ヴォーンズが捕虜として連れ去られた。これを機にマリゴール、グリゴール、イエットの三国が一気に緊張状態に陥り、フレリアが揺れている。このまま共倒れになるのを見ているのも面白いが…暇つぶしに少し仕掛けに行かないか？」

「具体的には？」

「シャーレイの中でヴォーンズを潰す。例の自尊心の強い統治者殿は生きたヴォーンズを交渉の切り札にするつもりだろうが、どうせどの国からでもいいように利用され何の成果も上げられないままヴォーンズを取り上げられる。今ごろ霸王に連なるものと呼び出したとてどのみちシャーレイは落ち目だ。ほどなくどこかに吸収される。だがここでヴォーンズが消えたら？」

嬉々とした顔で彼は焼き菓子を口に放り込み、再び喉を潤した。

「とりあえず、シャーレイの阿呆な統治者が切り札を失い茫然となるのは目に見えている。それから“アキルノ”を所有するグリゴール、“クレシキ”を所有するイエットに対しマリゴールは大幅な戦

力低下に陥り、危ういながらも調和平衡を保っていた三国の膠着状態が崩れるだろう。そこで気を取り直した死にかけのシャーレイが“カラシナ”をぶら下げてどう出るか。さらに上辺では中立を謳っているフレリアがどう出るか。なかなか見物じゃないか？」

「それって暗殺が前提でしょ？ 貴方の性格上、そんな器用なことができるとは思えない。首謀者だとばれて睨まれるのがオチね」

呆れたという態度で少女は返す。

「睨まれたところで少しも怖くないがな。むしろ、自分の運がどれほどのものか試すことができると思うと期待に胸が膨らむ。堂々と暗殺しに行つて運良く誰とも遭遇せずにそれを成し得るか、それとも“運良く”予想の上を行く出来事が起きてオレを今後楽しませてくれる方に転ぶのか」

「…暇人。高見の見物中に足を引っ張られて転ぶがいいわ」

素っ気ない態度で返すカンナに、男はとても満足そうに目を細め、言った。

「退屈しているのはお互い様だろう。それにオレが転んだらお前も共に転ぶのだぞ？」

目が覚めたのは夜10時を回った頃だった。

体感時間は短かったが異世界召喚なるものを体験した僕は、いつの間にか自室に戻っているのに気づいたのとほぼ時を同じくして、パソコンを強制終了するみたいに自分の意識を手放した。

いろいろありすぎてキャパオーバーを起こしたのだろう。ベッドの上で目覚めることができた僥倖をかみしめ、二歩の距離に心から感謝した。

のろりと体を持ち上げて室内を見渡す。部屋の隅に置かれた収納ボックスと、その上にきつちりたたまれた衣類、床には今朝発見したホコリの塊が落ちており、どれも動いた形跡がない。

？とりあえず、ご飯…

空腹を訴える腹に手を当てながら階段を下りると、大理石が敷き詰められた広い玄関が目に入る。いつもならあえて視線を向けないようにしているその場所に、今夜の僕はほんの少し興味を抱いた。あの無駄にでかい扉がこの世界と僕とを隔絶する結界の一つだとマンガのようなセリフを心でつぶやきながら、ドアノブに手をかける自分の姿を想像する。

？無いな。それだけは無い。

ゆるゆると頭を振って浮かんだヴィジョンをかき消した。

のろのろとした足取りでリビングに入り、オープンキッチンを照らす明かりを付けて冷蔵庫から食物を取り出す。ラップの掛かったどんぶりとお鉢を取り出して、そのままレンジの中へ。600ワットで3分もあればそれなりに温まるだろう。

その間にキッチンボードから取り出したコップに牛乳を注いで、ダイニングテーブルの上に置く。そこには先客がいて、手に取って目を通すとそれはそれは美しい字で「明日はお休みを頂きます。美代子」と書いてある。じゃあ明日は一日中気を楽しんで過ごせる

なと安堵したところで「チン」という馴染みの音が鳴り、四角い箱の扉を開けて温まった食事を取り出すとテーブルまで運んでいった。薄暗い部屋で、もくもくと食べ続ける。最後に牛乳に口をつける

と、一気にそれを飲み干した。

いつもと食べる時間が違うせいかな、しばらく腹に何も入れていなかったせいなのか、どことなく物足りない。空いたどんぶりとお鉢、コップを流しに置いて水を張り、菓子置き場からせんべいを3袋と冷蔵庫から1リットルのお茶を取り出して自室へと戻る。

その頃にはアレは夢だったんじゃないだろうかと思えて来て、もやもやする頭を切り替えるために久しぶりにシャワーを浴びようとそのまま浴室へ向かった。

母親には昔からカラスの行水と顔をしかめられていたが、本人からすれば効率の良い入り方をしているにすぎない。自分ルールで手際よく身を清めた僕は洗濯された衣類を身にまといさっさと浴室を出る。熱気の立ちこめたあの空気が苦手なのだ。

それなりにスッキリとした気分ですべて部屋へ戻り定位置に着席すると、ますますあの体験は夢だったんじゃないだろうかと思えてくる。現実との境界が極めてあやふやな白い真昼の夢。それが身に起きた真実だったのならば立ったまま寝てたっていうオチで片付くのだと気づいた僕は、記憶を無理矢理追いつくように情報の海へとダイブした。

せんべいをかじり、お茶をちまちま飲みながら、いつも通り、ネット小説や動画を見て。

ニュースに目を通し、気になったことや知らないことを検索していく。

そうしていつの間にか夜は更けて行き、辺りが薄明るくなった頃。ヘッドホン越しの耳に届いた重低音を合図に固まった背中を伸ばし、最後にソフトウェアのアップデート確認ボタンをクリックする。ほどなくしてアップデート項目があることを知らせるウィンドウが開いて、ダウンロードを実行するための管理者確認用のパスワードボックスが現れる。慣れた指運びでそれを打ち付け、薬指をエンターキーに伸ばした時だった。

?ああ…………デジャヴが…

ぼんやりと思うと同時に、僕は再びあの世界へ足を踏み入れているか???

参戦前夜　？世界は回る。僕だけを置き去りにして？（後書き）

やっと…やっとヒロインが登場したよ！！（D、；）

長かった…出たくて出たくてウズウズしていたけれど、これでちよつとすつきりさ！

はっ…すみません。調子にのって口調が軽くなりました。。

前回投下からお気に入りに入れて下さった方がまた数人増えていてとても嬉しいです。

読んで下さった方、どうもありがとうございます>（―――）<

今月はもう一話くらい書ける…といいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5565u/>

喚呼の法

2011年11月5日20時55分発行